様式２の１

記　入　日　　令和５年10月20日
助成団体名　　本願の会

2022年度「水俣・熊本みらい基金」助成事業報告書

企画テーマ	若者が自ら考え作る水俣訪問学びあいプログラム
取り組み実施期間または日時	令和４年11月～令和５年９月

【取り組み目的】

水俣病問題は、以下の二点から構成されている。①水俣病問題が発生した時、加害企業や行政が被害を握りつぶそうとした事。②海も大気も無限ではなく浄化能力を持たない事を承知していながら有害物質を廃棄したところから起きた問題である事。①は、その後、水俣病闘争や患者運動の発端となり展開され、水俣病問題として注目されてきた。今日でも裁判の場で問題として継続しているが、問題に対しての政治決着がなされ、また、最終的な結論が個人の被害に対する補償であることから、人々の関心は、かなり薄らいでしまっている。そこには、問題を処理しただけで誰も何の反省すらない。

本願の会では、人間だけでなく被害を被ってしまった生物に祈りを捧げると共に②について人間が生み出した文明の根幹の問題として思案し議論してきた。通信「魂うつれ」にも度々掲載してきている。①で展開される水俣病問題は、加害者対被害者と言う対立構図で考えるが、既に、それぞれの立ち位置は、加害者と被害者の両面を持つ事を自覚しないとならない状況となっている。更にこの問題や視点を水俣からの発信として次の世代に受け取って欲しいと考えている。病から始まる水俣病ではなく、文明の中で水俣病を捉えなおし、若い世代に如何に生きるかと言う自らへの問いとして欲しい。

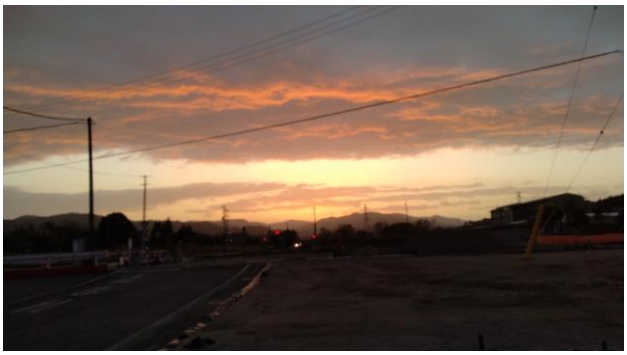
【取り組み内容と成果】

令和５年４月までは、筑波大のMSさんと東北福祉大のYTさんと順調にメールを通じて交流ができた。４月に、仙台、大熊町、いわき市を回り、直接会って意見交換をした。YTさんは、いわき市出身で小学校低学年の時に東日本大震災に遭い、その夏一月ほど水俣で過ごした。その縁で若者が自ら水俣を学ぶプログラムへの参加を打診していたが、自分では力不足だと辞退を申し出された。問題意識が高いMSさんとは、交流を続けて二つの課題が明らかになった。そして、このプログラム作りを断念する事とし、新たに魂石の安置式「水俣が私に問う日」を恒例行事として定着させていく事とした。以下は、明らかになった課題である。

① MSさんは、東日本大震災そして福島原発事故の被災者であると同時に東京電力社員の父親のもとで育った。その生い立ちと表現力から高校生の時から人前に立ち語り部を務めてきている。求めに応じただけの焦点の絞り切れない話であるが、未熟と言って年頃の本人は、生まれ故郷が元の姿に戻っていく事だけを夢見て語ってきたと語った。しかし、生まれ故郷は、元に戻るどころか、全く別の町に変貌していってしまった。何のために語り部をしてきたのだろうとしきりと悩みこんでいると話してくれた。その一方で語り部をすることで注目を集めスポットライトに当たってきた。その

快感のような感覚が自分の中にあると自覚している。やり取りを続けていくと精神的にとても不安定である事が明らかになっていった。彼女を軸にして水俣を考え学びあうプログラム作り事業を展開する事は、非常に酷なものだと判断した。それは本人の問題ではなく、意図せず与えられた状況と彼女を取り巻き利用してきた大人が生み出した問題だと言える。復興と言えば聞こえは良いのだが、あまりに急ぎ過ぎだと言わざるを得ない。福島における原発事故の被害とは、何なのか被害の実相も確認できないにもかかわらず、風評被害の話が優先されるとは、どういうことかと首を傾げたくなる。彼女に周りの人間が何かを望むべきでないとも考えた。風評被害と語り部、とんでもない無理難題がそこに横たわる。

水俣における風評被害は、地域社会や親族間で忌み嫌われる病像から生まれてしまったものや意図的に被害者を攻撃して封じ込めるためのものが、地域外にも伝播してしまった。地域社会が混乱し不安が増す中で、唯一その実態を知る事ができる立場の地方自治体市行政は全くの不作為であった。企業城下町において地方自治体は、如何なる対応をすべきなのか、権限をもった第三者的な機関を設置することも含め、水俣で検討されてこなかったことは、実に遺憾である。



今から 10 年程前に福島の風評被害対策として、福島で生産される豊富な果物を使ったスイーツ作りコンテストが水俣、患者多発地帯の中にある袋中学校を舞台に行われようとしたことがあった。成長期の子供を持つ親たちは、危険不安を感じていたが、その事業を持ち込んできた相手が、元市職員、市 PTA 連合会長や有名患者家族であったため、声を上げて反対できず、袋中 PTA 会長が直前会長の自分に相談を持ち込んできた。私は、SNS を使って、事業のナンセンスさを伝えた。結果、事業の縮小、中止につながったという事があった。水俣、袋は、誰かに利用される場所になりうるのだと考えた。

② 彼女から学んだ事がもう一つあった。水俣、水俣病をテーマとする研究を行っている若手研究者と水俣の入り口、アクセスポイントの問題である。水俣には、いくつかの水俣病闘争、患者運動を支援してきたコミュニティーが存在する。今後、どのような展開をするか、如何にコミュニティー自体を継続しいくのかは共通の課題である。このような状況の中では、自分たちのコミュニティーに有利となる情報ばかり発信する事になる。本願の会は、運動支援団体ではない。そのためか、不利益を被っている側面がある事を知った。変質して行われ続けている「火のまつり」は、もともと本願の会で創作された魂石（お地蔵さん、石像）を水俣湾埋立地に安置するために石牟礼道子さんと私が創作した行事だった。亡くなった生命に帰って来てもらう事を考えて儀式の部分を考え、火を使ってイベント性をもたせた。5 回目の頃、儀式の部分が気味悪いと行政から指摘され、イベント部分だけが「火のまつり」となった。以後、行政からの依頼を受けて、運動団体の若者が行事を行っている。この初回の「火のまつり」で故杉本栄子さんが読み上げた祈りの言葉の制作者は、私である。しかし、まる

で、どこからか湧いて出てきた様に扱われているのは、まことに失敬だ。本願の会では、安置の際に御夜という形で儀式を行ってきていたが、コロナもあって、6 年間程実施できていなかった。彼女の話を受け、発信が足りないと自覚し、副会長の緒方正人さんと相談して「水俣が私に問う日」と命名して定期的に行う行事にしていく事にした。9 月 6 日に会員で石彫と縁の深い大鼓の人間国宝、大倉正之助さんを招いて実施した。参加者は、老若男女 60 名程であったが、良い時間が持てた、来年もやって欲しいと嬉しい言葉をたくさんいただいた。

【備考欄】

事業前に発行した「魂うつれ 79 号」と当日の記録ビデオは、郵送します。

私が、自分で漉く和紙で生活できるようになった時、誰よりも喜んでくれたのは、石牟礼道子さんだった。道子さんは、水俣病の事をする事で生活していくことを嫌った。最近、その事の意味が少し解るようになった。

プレスリリース

本願の会魂石安置式「水俣が私に問う日」

本願の会は、自分たちが水俣に願っているのではなく、水俣が私たちに願っていることを各人が自分自身に問いかける事を本願としています。自分自身に問いかけながら石を彫る活動を月に一度ずつ行っています。既に亡くなられた多くの患者さんたちや石牟礼道子さんをはじめ関りのあった方々の思いを引き受けていっています。完成した魂石（石仏、お地蔵さん）は、水俣湾埋め立て地親水護岸に安置していっています。1994年に活動が始まってから現在まで 56 体の魂石を安置してきました。前回の安置式は、熊本地震のあった 2016 年の 9 月 28 日でした。これまで安置式に名前がありませんでしたが、今回、水俣が私に問う日と命名し下記の様に執り行う事としました。この活動の最初から関りのある人間国宝の大鼓奏者大倉正之助さんが、海上から大鼓を打ち、気を入れます。共鳴をしてくださる皆様に是非この時間を共有していただきたくお誘いをさせていただきました。

記

日時　令和 5 年 9 月 6 日　15 時より
場所　水俣湾埋め立て地親水護岸中央部付近
（雨天の場合　同日 16 時より　水俣市月浦オレンジ館）
会費　1000 円（会員の方は、無料）
問い合わせ　本願の会事務局（金刺）　0966-63-2980、090-3197-3543

以上